

心のめばえ

<27>

著者／牟田 泰三
挿絵／橋本 礼子

5歳1カ月 ママが泣いてた

ある日の朝、アヤがやって来て、バアバに「ジイジはどこ」と聞いている。

バアバ「お二階の書斎だよ。どうしたの？」

アヤ「ジイジにお願いしたいことがあるの」

バアバ「そう、じゃあ、お二階に行ってジイジにお話ししてらん」

と言われて、アヤが書斎にやって来た。

アヤ「ジイジ、ママが泣いてたから何とかして」

ジイジ「えっ、どうしてママが泣いてたの？」

と聞いたら、アヤはしくしく泣き出してしまった。「一体どうしたというのだろう」。

これにはちよつとした伏線があつて、そのことを説明しなければならない。実は、数日前にママの伯母さんが亡くなり、ママはお葬式のために急遽島根に行かなければならなくなつた。アヤはまだババと二人でお留守番はできないので、ついて行くしかない。ところが、困つたことに、ちよつと風邪気味で微熱もある。でも、仕方がないのでママが連れて行くことになつた。

島根に着いてみると、アヤは高熱を發してぐったりしてしまつたらしい。電話でこれを聞いたババはひどく心配になつて、「すぐ帰つてきなさい。病院に連れて行かなきゃ駄目だ」と言つたそうである。

「でも明日のお葬式に出ないと悪いし」と躊躇しているママを、ババは「アヤの体とお葬式とどっちが大事なんだ」と喝した。



それは尤もなことである。でも、親戚縁者に対する義理ということもある。一方、かわいい我が子を病気にしてしまつたという責任感と後悔もある。親戚への義理と我が子の病気との板挟みになつて、ママはどうとう泣き出してしまつたのだ。ママが泣く姿などこれまで見たこともなかつたアヤは、病気でぐったりしてソファに横になつていても、とても驚いて心配になつたのであろう。

結局、アヤとママはその日のうちに帰つてきて、ジイジが予約しておいた病院に急行して手厚い看護を受けたお陰で、翌日にはかなり熱も下がつた。

そこで、さらにその翌朝になつて、元氣も回復したアヤはジイジの家にやって来て「ジイジ、ママが泣いてたから何とかして」になるわけである。何をしてくれというのだろうか。ババとママがけんかしているとも思つたのだろうか。いや、それはないだろう。だつて、島根から帰つて以来、ババとママはずつと協力してアヤの世話をしているのだから。では、自分が病氣してしまつて、島根から急遽帰ることになつてママを悲しませたからジイジにとりなしてもらいたいと思つたのだろうか。そうかも知れない。それにしても、なぜジイジなのだろう。そんなことならバアバに頼んでもいいはずだ。

どうやら、我が家の中でのそれぞれの役割というものについて、アヤなりに考えを持っているらしい。我が家のマネジメントに関する記事を最後に頼みに行く先はジイジだと思つているようだ。

幼稚園で、友達が転んで泣いていたらクラス担任の先生に伝えるだろうが、車が幼稚園の門にぶつかつてきて、車も門も大破しているのを見たら、園長先生のところへ訴えに行くのだろうか。それと同じように考えているのかも知れない。

「心のめばえ」のバックナンバーは、牟田のホームページでも読むことができます。下のQRコードをスマートフォンなどで読み取ると簡単にアクセスできます。



ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@pressnet.co.jp
「心のめばえ」係へ

プロフィール むた・たいぞう 1937年、福岡県生まれ。九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、理学博士。京都大学助手・助教授、広島大学教授・学長、福山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀樹のことば」(丸善出版)、「電磁力学」(岩波書店)、「量子力学」(裳華房)などがある。東広島市在住。